（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　野田　仁

本論文は、18－19 世紀中央アジアの大草原に展開した最大の遊牧集団、カザフ=ハン国が、ユーラシア東西の大国、ロシアと清朝とのせめぎ合いの中で最終的にロシアに帰属する過程を実証的に検討したものである。自らが残した文献史料がきわめて乏しいカザフ=ハン国史研究では、ロシアとの交渉をはじめとする対外関係の研究は重要な位置を占めてきた。しかし、かつてのソ連史学はカザフ史研究においても強い偏りをもっていたことはいなめず、また中ソ対立はカザフの対外関係を客観的に検討する可能性を閉ざしてきた。これに対して、著者はロシア語、漢語、満洲語、タタール語、ペルシア語などの未公刊文書を含む多言語史料を活用し、カザフ=ロシア関係にとどまらず、カザフ=清朝関係と露清関係に検討を加え、この三つの関係軸の相互作用を視野に収めながらカザフ史の展開を読み解くという方法をとっている。

本論文は問題提起の序論に続き、３部構成の本文７章と結論からなっている。第１部では研究史の批判的な検討と重要なタタール語史料、クルバンガリー『東方五史』（カザン、1910 年）の紹介を行った後（第１章）、18 世紀初頭から 19 世紀前半までのカザフ=ロシア関係を概観し、カザフのハンによるツァーリへの臣籍宣誓やロシアによるカザフ草原への管区制の導入などの問題を検討する。第２部ではまず清朝がモンゴル系遊牧勢力ジューンガルを制圧した後の中央アジアにおける露清関係を整理した上で（第３章）、直接の隣人となったカザフに関する清朝の認識（第４章）と清朝によるカザフ君主層への爵位授与の問題（第５章）を具体的に検討する。第３部ではロシア領の西シベリアと清朝治下の新疆とを結ぶ露清貿易にカザフがどのように関与したかを検証した後（第６章）、カザフ草原へのロシア統治の拡大と浸透、そしてカザフ=清朝関係の衰微という構図の中でのカザフ=ハン国の解体過程を考察する。

本論文は、ソ連解体後にようやく利用が可能となったロシア側史料を精査するとともに清朝側史料を可能な限り活用することにより、中央ユーラシアにおける露清関係の枠組みの中にカザフ=ハン国史の展開を位置づけ、これを対ロシア関係に偏ることなく、バランスよく描くことに成功しているといえる。18－19 世紀のカザフ史について多くの新しい知見を見いだし、また境界や臣籍に関するカザフ、ロシア、清朝の認識の相違を明らかにしたことも興味深い。その一方で、本論文の淡々とした叙述は、新しい知見を明示的に提示するのに必ずしも十分ではなく、またカザフ社会の内部構造はなお不明なところが多いなど、今後に残された課題もあるが、本論文は全体として中央アジア史研究の新しい可能性を拓いた労作と評価することができる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。